

話題提供 ①

接触場面研究とそのむこう

加藤好崇
東海大学
国際教育センター

1. 問題の所在

- 留学生のインターアクション問題を減少させるためにどうしたらいいのか？
- ミクロの接触場面研究結果をどのように問題解決に繋がられるのか？

【表1】会話データ分析のむこうの3段階

A 会話データ分析	初対面(第二回・第三回)接触場面分析
B 実践への活用・改善	「接触場面演習」: 自己調整能力の育成
C 社会的貢献	「共生」の規範とその管理

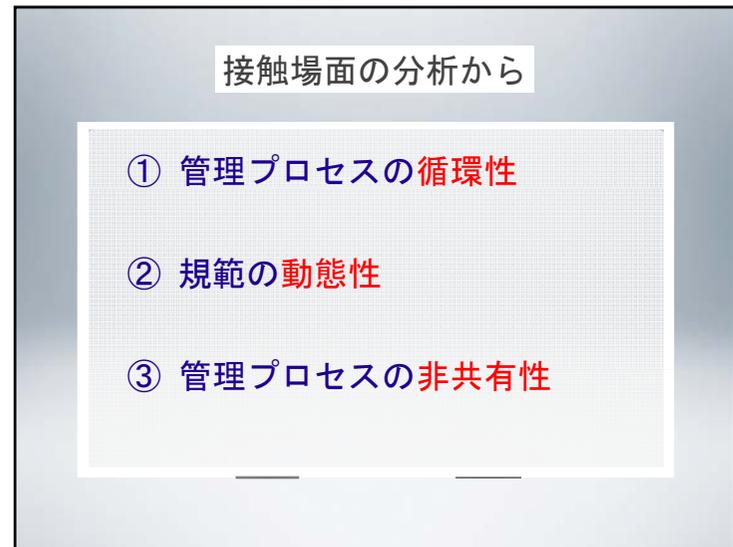
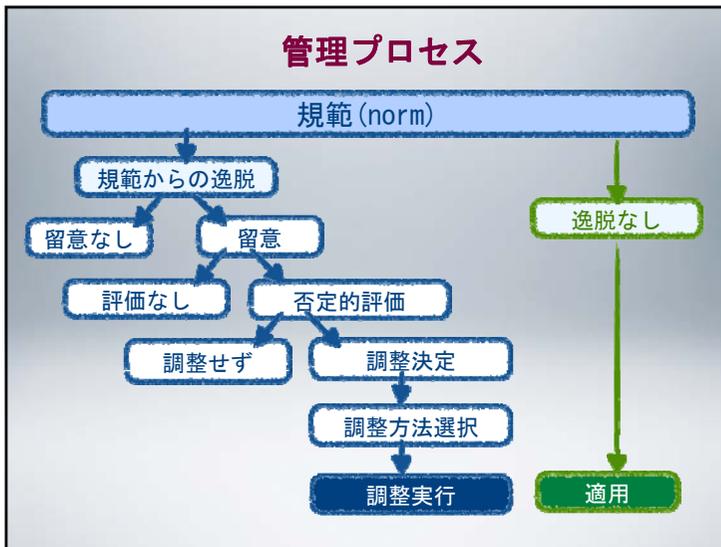
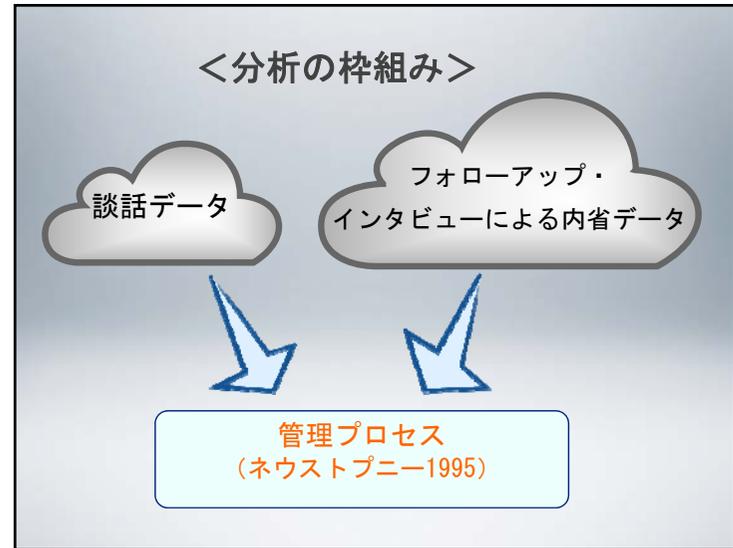
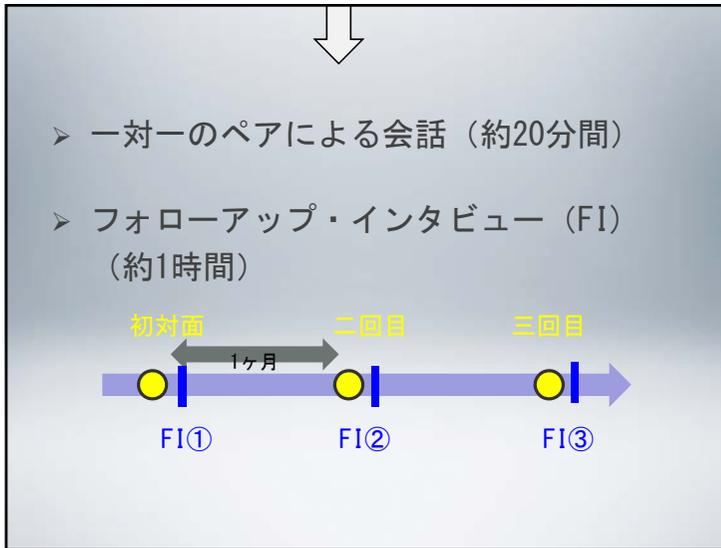
2. 会話データ分析の社会的貢献の3段階

2.1 A段階：会話データ分析

<データ (加藤2010) から>

参加者

- 日本人大学生・大学院生 13名
- 学部留学生・大学院留学生 13名
(中国人6名、タイ人4名、韓国人3名)



<会話例：参加者と場面>

参加者	中国人学部留学生 C	日本人学部生 J
性別	男性	男性
年齢	21歳	22歳
所属学科・学年	電子工学科 1年生	電子工学科 4年生
日本語能力	上級	
場面	一対一初対面場面	

<初対面>

C: そうですね, <笑う>そうですね. ・あ, じゃあ, じけんは, どういう, レポートたくさん出る? (肘をテーブルの上に置いている)

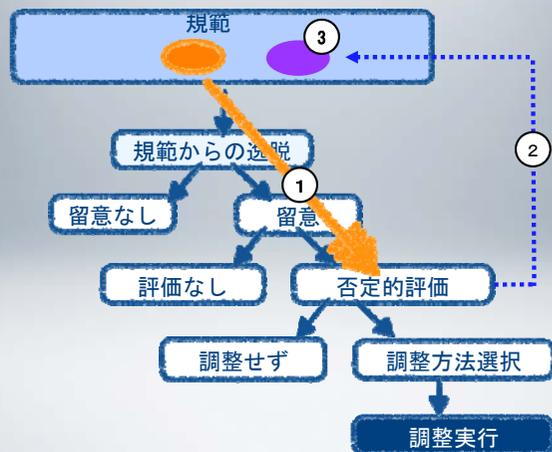
J: いやあ, 全然, 試験を・微分, 積分のテストだけかな. (両手を膝の上に置いている)

C: あ, テストだけだ.

J: うん. . .

C: ああ, 今, 微分と, 微分積分やってる: <ああ>けど, ・ちょっと難しいな. (肘をテーブルの上に置きながら髪を触る)

管理プロセスの循環性と規範の動態性



管理プロセスの非共有性



【表1】会話データ分析のむこうの3段階

A 会話データ分析	初対面(第二回・第三回)接触場面分析
AからBへの橋渡し	
B 実践への活用・改善	「接触場面演習」:自己調整能力の育成
C 社会的貢献	「共生」の規範とその管理

研究結果から実践への橋渡し

- 宣言的知識の伝授だけでは規範の動態する接触場面に十全に参加できない。自己調整能力の育成が必要
- 管理プロセスを活性化、循環させればより適切な規範を生成できる可能性がある
- 管理プロセスの共有化の促進が必要

問題

問題

- 管理プロセスは頻繁には起きないし、起きても忘れやすい。
- 管理プロセスが循環し、規範が変容するまでに一定の時間が必要である。
- 接触場面の管理プロセスは接触場面内では生起しない。
- 管理プロセスは共有されにくい。

調整行動

問題を取り除くための調整

- a. 接触場면을教室に取り込む。
- b. 管理プロセスが授業時間内に集中的に連続して生起しやすい状況を設定する。
- c. 管理プロセスを意識化させる方策を考える。
- d. 管理プロセスの共有化させる方策を考える。

2.2 B段階：実践現場への活用

a. 接触場면을教室内に導入

- 日本語上級クラス8名（韓国人7名・中国人1名）＋日本人学部二年生9名（2011年度「接触場面演習」）
- 留学生2名、日本人学部生2、3名から構成される4、5名グループで常に活動
- 使用言語の制限無し

b. 管理プロセスが生起しやすい状況設定

- 初対面場面
- 「誘い」「断り」「詫び」の発話行為を含んだロールプレー
- 価値観に関わる討論・アンケート・インタビュー・ハンドアウト作成・プレゼンテーション作成の共同作業

など

c. 管理プロセスの意識化：内省シートの導入

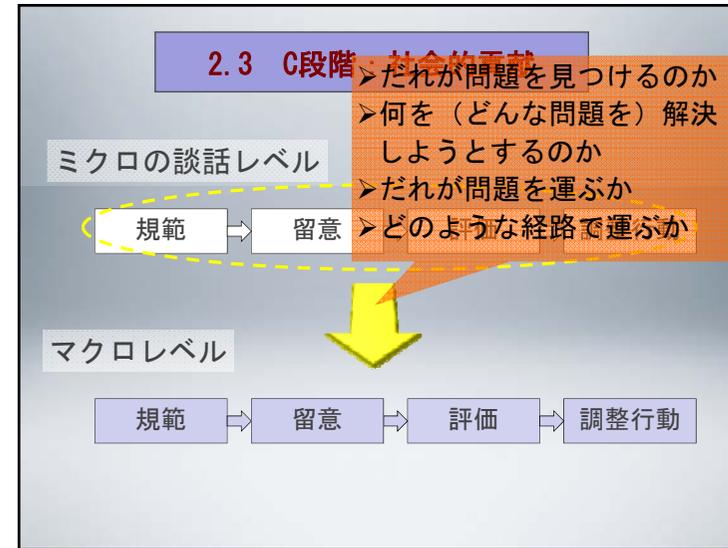
- 必ず授業後、記憶の新しいうちに実施
- 管理プロセスに沿って内省
- 規範の動態性に注目
- 自己調整能力の育成

d. 管理プロセスの共有化

- 内省シートの内容を全体化
- 自分の管理プロセスについてグループでディスカッション

【表1】 会話データ分析のむこうの3段階

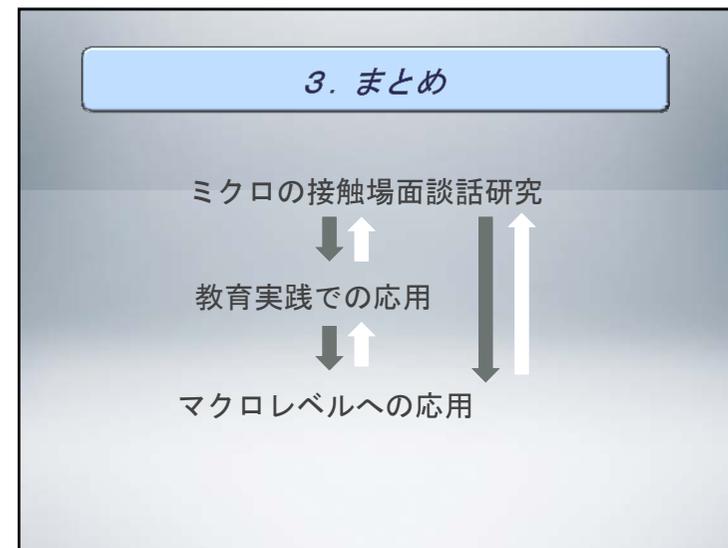
A 会話データ分析	初対面(第二回・第三回)接触場面分析
B 実践への活用・改善	「接触場面演習」: 自己調整能力の育成
C 社会的貢献	「共生」の規範とその管理



➢ 「すべて言語問題の基礎は談話のミクロレベルにある」(ネウストプニー1997*)

*ネウストプニー, J.V. (1997) 「プロセスとしての習得の研究」 『阪大日本語研究』 9, 1-15.

➢ 「共生」規範の管理プロセス



ご静聴ありがとうございました。

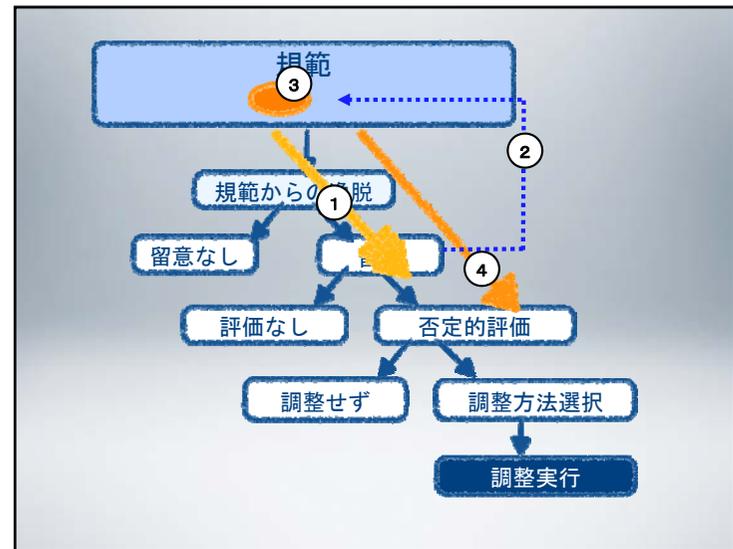
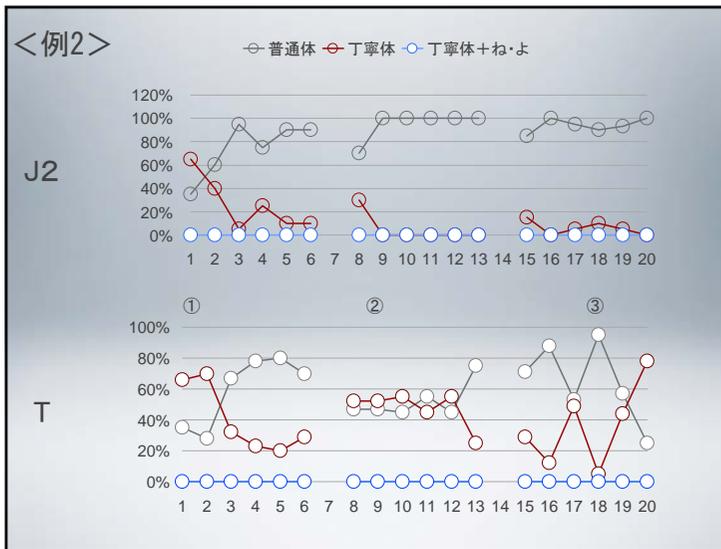
＜例2：参加者と場面＞

＜参加者＞

- タイ人留学生(別科) T (女性・1年生・21歳・日本語中級者)
- 日本人学部生 J (女性・4年生・22歳)

＜場面＞

- 一対一初対面場面



- 日本語母語場面ではあまり意見を言わないが接触場面では留学生が積極的だったので、意見が言いやすかった
- 日本人はまず周りの考えを聞くことが多いが、韓国人は初めに自分の意見を言ってから相手に意見を求めるといった。そのためかえって接触場面ではうまくいくと思った。しかし、性格によっては意見が出せない日本人もいると感じた
- 留学生が携帯をみんな持っていたわけではないので連絡がリアルタイムで取れなかった

<留学生>

- 韓国母語場面ではあまり意見を出さないが接触場面では意見を出した。意見を出さないとみんな黙ってしまうから。
- 準備のための時間調整が難しい（韓国ではコンピュータメッセージを使ったり、簡単なホームページを使ってコミュニケーションをとる）
- 日本人学生は「すみません、ちょっといいですか」といって自分の意見を言い、「すみません、途中で」といって謝っていたので違いを感じた